

事例2

笠岡諸島(笠岡市)・岡山県

島と島をつないで

瀬戸内の七つの島が思い描く離島の未来



- 七つの島からなる笠岡諸島では、急速な人口減少・高齢化への対策のため、各島の特徴を生かした島おこしを実施。
- 観光だけでなくインターンシップ生とのまちづくりや、私立高校の通信制コースのスクーリングの場として若者との交流を進めている。
- 各島の暮らしのサポートや産業開発などをNPO法人が中心となり、島民の声を聞きながら連携して進めている。

岡山県西南部の笠岡市沖、瀬戸内海の中心に浮かぶ笠岡諸島。大小30の島々のうち、高島・白石島・北木島・真鍋島・大飛島・小飛島・六島の七つの有人島をつなぐ交通手段は船のみで、離島ならではののんびりとした空気が流れています。古くは海上交通の要衝として栄え、穏やかな自然環境のもと、多彩な伝統文化・歴史を刻んできました。しかし、生活環境の厳しさや産業の衰退なども相まって、この10年間で人口は3割強も減少するとともに急速に高齢化が進んでいます。こうした中で島の暮らしを守ろうと「NPO法人かさおか島づく

り海社(がいしや)の活動が島々をつなぐ取り組みを行い、さらに各島で住民の自発的な活動としてまちづくり協議会が立ち上がり、島おこしの気運が高まっています。「NPO法人かさおか島づくり海社」は、平成28年秋に国土交通省が主催する「しまっちんぐ」にも参加しました。今回は白石島、北木島、大飛島、六島の4島を訪ね、それぞれの島の活動や笠岡諸島一体となった取り組みについて紹介します。

六島
都会からの大学生が島を活性化
インターンシップ事業を継続して実施

住吉港から普通船で1時間、笠岡諸島の最南端に位置し「灯台と水仙の島」として知られる六島では、六島まちづくり協議会の企画のもと、大学生が約1カ月間滞在しながらまちづくりを提言する「六島インターンシップ事業」を実施しています。滞在の世話をする三宅千代美さんは、大阪から島へ嫁いで子どもを育て、地域のまちづくり事業に参加しています。平成24年から8回の開催を通じて、空き家の調査や灯台と水仙の観光資源化、びわ茶などのお



土産づくり、地域交流の場「島小屋」や花見スペース「ちえあパーク」の整備など、次々とインターンシップ生がプロジェクトを完遂するのを見守ってきました。取材時は、六島まちづくり協議会の「六島水仙植えるカムツアー」の準備中で、「島の高齢化が進む中、「六島ファン」の方々の手を借りながら、少しでも長く続けていけたらと思います」(三宅千代)。

目視による空き家の調査結果を反映した島の集落模型はインターンシップ生が作製。壁にはこれまでの活動が紹介された壁新聞が掲示されていた。「今も第二の故郷とって顔を見せに来てくれる子もいます」と話す三宅さん。



空き家をリノベーションして作られたゲストハウス「島小屋」も、インターンシップ生の発案。六島まちづくり協議会の事務所でもあり、地域の交流の場にもなっている。



飛島自治振興会
山本昇吉 会長

廃校になった小学校を通信制コースのスクーリングの場として利用



通信制コースのスクーリング(面接指導)などに活用されています。現在は約10名が、月1回ほど来島しますが「もっと多くの生徒や先生に来てもらいたい」と山本さんは期待を寄せます。「険しい表情の子どもも飛島では穏やかな表情に変わる。飛島の風土にはそんな効果があるようです(山本さん)。昨年は飛島特産の椿の実から精製する天然椿油製造のため

潮待ち風待ちの島と呼ばれ、国の名勝に指定されている白石島。その昔、源平の合戦での戦死者を弔うために始まったとされる盆踊り「白石踊」や弘法大師ゆかりの開龍寺、国指定天然記念物の奇岩「鐘岩」など豊かな観光資源を持ち、白石島の海水浴場は、岡山県の三大海水浴場にも数えられています。また、外国人が主に利用する国際交流ヴィラもあり、外国人観光客の姿を見かけることもあります。そんな白石島も平成に入り、人口・観光客ともに減少傾向にあることから、島の魅力を改めて伝える活動が活発化しています。公民館長の天野正さんは、白石踊保存会の役員やかさおか島づくり海社の理事を務め、その活動を支援する一人です。「無理をしても続かない。各自がやりたいことにじっくり取り組める環境を用意するのが私の仕事です」と語ります。また「地域おこし協力隊」など、島外からの支援者を受け入れる取り組みも進めており、平成29年4月には大阪府出身のムヤ歩さんが着任しました。ムヤさんは国際交流ヴィラの管理を行いながら、島の課題について解決を図りたいと目を輝かせます。「多

様性を受け入れる包容力が白石島の魅力を増していると思います。早く島になじみ、定住促進の良い事例になりたいですね(ムヤさん)。

北木島 各島のあらゆる課題を 諸島全体で解決していく

各島で個々に課題に取り組んでいたのでは、課題解決への対応はなかなか立ち行きません。NPO法人かさおか島づくり海社は、平成8年にこうした島の現状に危機感を持つ有志が集まって熱心な議論を行い、「島を一つに、心は一つ」の考えから、諸島を一つの島と見立てた生

大飛島、小飛島の2島からなる飛島は、かつて海運業の島として栄えましたが、現在では笠岡諸島の中で最も高齢化が進んでいます。飛島自治振興会(飛島まちづくり協議会)の会長を務める山本昇吉さんは、「島の生活は限界に近づいています。人口減少で生活維持はもとより人間関係すら維持できない」とその切実さを訴えます。高齢者の割合は7割以上で、介護や生活支援の手も足りない状況です。そんな中でも、なんとか島を活性化しようと島おこし事業に取り組んできました。廃校となった旧飛島小学校の校舎整備もその一つです。島の内外に開放され、私立興譲館高等学校の

通信制コースのスクーリング(面接指導)などに活用されています。現在は約10名が、月1回ほど来島しますが「もっと多くの生徒や先生に来てもらいたい」と山本さんは期待を寄せます。「険しい表情の子どもも飛島では穏やかな表情に変わる。飛島の風土にはそんな効果があるようです(山本さん)。昨年は飛島特産の椿の実から精製する天然椿油製造のため

飛島 笠岡諸島一番の高齢化の島 切迫した声に耳を傾けて

大飛島、小飛島の2島からなる飛島は、かつて海運業の島として栄えましたが、現在では笠岡諸島の中で最も高齢化が進んでいます。飛島自治振興会(飛島まちづくり協議会)の会長を務める山本昇吉さんは、「島の生活は限界に近づいています。人口減少で生活維持はもとより人間関係すら維持できない」とその切実さを訴えます。高齢者の割合は7割以上で、介護や生活支援の手も足りない状況です。そんな中でも、なんとか島を活性化しようと島おこし事業に取り組んできました。廃校となった旧飛島小学校の校舎整備もその一つです。島の内外に開放され、私立興譲館高等学校の



飛島に自生するヤブツバキから精製した椿油

の種子粉碎機なども導入し、量産化の体制を整えました。「できることをやる。そのために人の力が必要です」と山本さんは語ります。

白石島 豊かな観光資源を活用し 再生を図る

潮待ち風待ちの島と呼ばれ、国の名勝に指定されている白石島。その昔、源平の合戦での戦死者を弔うために始まったとされる盆踊り「白石踊」や弘法大師ゆかりの開龍寺、国指定天然記念物の奇岩「鐘岩」など豊かな観光資源を持ち、白石島の海水浴場は、岡山県の三大海水浴場にも数えられています。また、外国人が主に利用する国際交流ヴィラもあり、外国人観光客の姿を見かけることもあります。そんな白石島も平成に入り、人口・観光客ともに減少傾向にあることから、島の魅力を改めて伝える活動が活発化しています。公民館長の天野正さんは、白石踊保存会の役員やかさおか島づくり海社の理事を務め、その活動を支援する一人です。「無理をしても続かない。各自がやりたいことにじっくり取り組める環境を用意するのが私の仕事です」と語ります。また「地域おこし協力隊」など、島外からの支援者を受け入れる取り組みも進めており、平成29年4月には大阪府出身のムヤ歩さんが着任しました。ムヤさんは国際交流ヴィラの管理を行いながら、島の課題について解決を図りたいと目を輝かせます。「多



国際交流ヴィラ



ムヤ歩さん



天野正さん



白い砂浜が美しい白石島



五つの峰を回る遊歩道。稜線沿いを縦走でき、山や海の景観も楽しめる。



冷蔵庫でじっくりと水分を抜き熟成中の魚。灰干しに使う灰は三宅島のもので、火山灰被害に悩む三宅島の人との出会いがきっかけになった。

真鍋島でデイサービスを開設し、この他にも暮らしをサポートする事業として買い物支援や有償運送事業、特産品作り、保育園運営、空き家対策など、多様な生活支援事業を展開しています。特産品の一つである笠岡諸島近海のおいしい天然魚介をもっと多くの人に味わって欲しいという考えから生まれたのが、灰干し「魚々干(うつつぼし)」です。北木島の女性たちが生産



島の大運動会



活支援を構想しました。しかし、近いとはいえ風土や言葉、気性、課題意識も異なる各島の人々をまとめるのは至難の業です。そこで平成10年に全島交流を目的とした「島の大運動会」を開催しました。島内外から5000人も人が集まり、そのとき生まれた横のつながりがNPO法人設立の礎となりました。

「既存の縦関係では暮らしては立ち行かない。協力の輪を横に広げ、連携の力で生活支援を行なっています。いわば、第二市役所的な立ち位置です」と理事長の鳴本浩二さんは話します。現在は、北木島、白石島、

北木島で出会った人

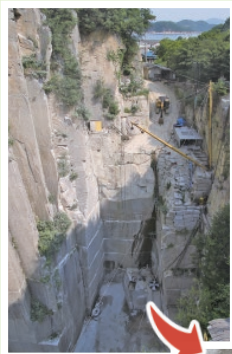
鶴田石材株式会社 鶴田康範さん



北木島は、靖国神社の鳥居や大阪城桜門などにも使用され、江戸時代から銘石として知られる北木石の産地です。しかし海外産の台頭で最盛期には島内に127カ所もあった採石場も現在は2カ所のみです。明治25年創業の石材会社の4代目を引き継ぐ鶴田さんは、石材業の振興とともに観光にも力を入れています。「製品化は採取の2割に厳選し、品質で勝負しています。美しく粘りがある北木石の魅力を伝えていくため、墓石や建材だけでなく、お土産として持って帰れるコースターなども作っています。また石切唄の伝承をはじめ、採石場に「石切りの深谷(たに)展望台」を設置し、今年

4月に映画館跡や採石跡地をルートに加えた日帰りツアーも始めました。父は「職人は見せ物じゃない」と展望台やツアーに反対しましたが、発信しなければ伝えていけません。この島に根付いた石文化を肌で感じて欲しいです(鶴田さん)。

平成27年度には石の文化全般が「かさおかブランド」に認定されました。ビルの23階にも匹敵する高さから見下ろす展望台での絶景は、新たな観光スポットとして注目を浴びています。



展望台から作業場を見下ろす。海面より40m下で石の切り出し作業。瀬戸内海の海岸線よりもはるか下だ。



に携わり、そこで雇用も生まれています。「今後も島に住み続けるためには就業の場が不可欠と考え、さらなる産業の立ち上げや活性化に取り組む必要があります。島民の声に答えて一つずつ取り組むことで活動を広げてきました。足踏みや時期待ちはあるけど、中止や失敗はありません。上手くいくまで止めないことが成果につながっています(鳴本さん)。



NPO 法人かさおか島づくり海社
鳴本浩二 理事長



旧北木小学校を活用し、島の自然環境を生かした研修活動が行える施設として北木島宿泊研修所(愛称「石切りの杜」)を開設。高齢者共同生活住居も兼ねている。

笠岡諸島への新しい玄関口

笠岡諸島への玄関口である住吉港。島への船を待つ間、港でちょっと小話に花を咲かせてほしい、そんな思いから「みなと・こぼなし」の愛称で親しまれている笠岡諸島交流センター。平成29年3月に完成した真新しいスペースは、通勤・通学、買い物などで船を利用する人の待合所として、また地域コミュニティの活動場所としても使われています。八寸勾配の屋根が特徴的なデザインは、岡山県立大学デザイン学部の学生によるもので、若い人も集まる魅力的なランドマークとして、新たな交流拠点としての活用が期待されています。

